

キネステティクを応用した体位変換により肩関節可動域が改善した遷延性意識障害の1例

Improved Range of Motion of a Shoulder Joint by Kinaesthetics-based Body-position Change in a Patient with Prolonged Consciousness Disturbance

渡辺 かほり¹、大友 昭子¹、大和田 宏美²、老松 廣子¹、佐藤 知子¹、中里 信和²、長嶺 義秀³、藤原 悟³
広南病院 東北療護センター 看護部¹、広南病院 理学療法室²、広南病院 脳神経外科³

Kaori Watanabe¹, Shoko Ohtomo¹, Hiromi Owada², Hiroko Oimatsu¹, Tomoko Sato¹, Nobukazu Nakasato²,
Yoshihide Nagamine³, Satoru Fujiwara³

Department of Nursing, Tohoku Ryogo Center, Kohnan Hospital, Sendai, Japan¹,

Department of Rehabilitation, Kohnan Hospital, Sendai, Japan², Department of Neurosurgery, Kohnan Hospital, Sendai, Japan³

【目的】自力移動が困難な重度の遷延性意識障害患者に対しては、従来のボディメカニクスの原理を応用した体位変換介助が依然として行われているのが現状である。キネステティクスの概念に基づいた体位変換とは、患者自身が自分で動いていると感じるように、身体其自然な動きを利用して介助する方法である。そこで我々は、当センターに入院している遷延性意識障害患者に対してキネステティクを応用した体位変換介助を施行し、その寝返り動作に対する関節可動域の改善効果について検討した。【対象】症例は33歳男性。自動車事故に伴う脳挫傷により遷延性意識障害となり当センター入院。受傷後12年を経過し、現在の広南スコアは63点、意思疎通困難、四肢麻痺・拘縮を認める。【方法】キネステティクの手技を習得し、対象患者に同一手技を提供するために、看護師のトレーニングを行った。2時間毎の通常の体位変換時に、キネステティクを応用した寝返り動作を、1日3-5回、3ヶ月間実施した。計測項目は、血圧・心拍数・経皮酸素飽和度および関節可動域テスト(ROMT)を2週間毎に計測した。【結果】キネステティクによる体位変換を施行後、特に患者の右肩関節屈曲の可動域が施行前より30°改善された。血圧・心拍数・経皮酸素飽和度への影響はなかった。【結論】キネステティクを応用した寝返り動作のみで関節可動域の改善が図れたことは今後の看護・介助のケアに期待できる。また、症例は受傷後12年経過しているにもかかわらず関節可動域の改善が図れたことは、慢性化した長期間の臥床を強いられている患者にも有効であると思われる。